

灰の詩

りいのうた

『つきのうた』

『百鬼夜行』

月の唄 時の声
また今日も雪が降る

百鬼夜行の成れの果て
歩み疲れて黄泉の底

愛しさも 切なさも
白に吞まれて消える

ぞろりぞろりと列を成し
真黒の障気を身に纏う

風は世界を渡り
空は涙に濡れる

百鬼夜行の成れの果て
逢魔ヶ刻を練り歩く

まるで此の世のすべてを
やさしく包むように

ひとりふたりと手招いて
逝く哀しみを誰が知らん

星は闇を照らし
永久を夢に刻む

『あい、れん』

『かたる』

愛情と哀情
恋情と憐情

語る。騙る。
物語る。物騙る。

音は同じ
けれど意味の違う幾つか

書き手は、読み手を騙る。

始まりは
憐哀だったかもしれない

そのセカイは、
紙面の中に、
画面の中に、
存在するのだと、騙る。

それでも、いまは。

そうして騙られたモノを、

いまは
恋し、愛して、此処に居る
側に在る

読み手は、
物語と呼ぶのかもしれない。

それは、
とても素敵なことだと
そう、思う。

『すずらん』

いまでは遠い、遠い日に
すずらの花が咲きました。

幼いわたしはその花が
ほんとに鳴ると信じてて、
小さなその手でそよそよと
ほそくやさしいその茎を、
鳴れよ、鳴れよとふりました。

すずらの花が咲くたびに、
いまでも小さなこの胸に、
あの日の風が、吹き抜けます。

『とまり木』

だれかのとまり木になりたい。
その翼の傷を癒すための。

苛立ちに任せて
傷つけられたとて、
構わないから。

『ことだま』

ぽつぽつと
浮かんでは消える泡沫の

吹いて散るような言の葉の

【中略】

ゆきのうた

『おはよう』

「おはよう」
たった一言で歩き出す
時計に合わせて、てくてくてく
やあ、またあったね
短針と長針は行き違う
歩く速度は赴くまま

ある日を境に時は止まる
同じところをぐるぐる
針の欠けた時計に時は刻めず
ただ「おはよう」を望んでた

『珈琲』

カッコつけてブラックなんて
頼んだけど、舌が痺れるくらい
の苦味以外何も感じなくて。
逆にそれが、火照った顔を冷ま
すにはちょうど良くて。
黒い水面に映るのは僕一人。
雨の香りが包む中、堪えきれず
砂糖とミルクを追加した。

『姫』

美しくて、美しくて、美しい
どんな寓話でも
どんな童話でも
誰が語ろうとそうなのだ
それが姫の定義なら、私は何に
なるのかしら。
国を滅ぼした暴君の娘？
魔女が遣わした傀儡人形？
或いは、そうね。
蹂躪された王国の姫ならば
物語の中では輝けるかな。

『黒』

澄んでいた瞳は、澱んだ景色に
魅入られて。
目を閉じれば、瞼の裏は黒い何
かで染まっていた。
それが業(いろ)だと気づいた
ところで、私は欲(いろ)に罪
(いろ)を重ねた。
それでも世界は、黒く妖しく美
しく、輝き続けている。

『底』

緩やかに、緩やかに
水底へと落ちていく
重力は次第に力を失い
肺に溜まった浮力に負けて
水面へと引き戻されて
手を伸ばせば触れられそうな
なのに遠い、その場所は
貴方の温もりを拒絶した
底の知れた私のような

最低のその下に私はいます

『ハロウィン』

今夜だけは怪物たちが
闊歩する、不思議な日
右を見れば狼男
左を見れば性悪魔女
じゃあ私は、と
白い包帯を手にとった

化物たちが闊歩する
今日くらいは胸を張れるかな

【中略】

『灰の詩』

著者：

水無月りい

真藤ゆき

発行者：

水無月りい

発行日：

2018年2月10日

印刷製本：

製本直送.com

連絡先：

minatukiryi@gmail.com

Twitter@MinatukiRyi

@yukix2yukkirin